



ふとうふくつひび

# 不撓不屈の人

一年間掲載した塙保己一没後200周年記念企画「不撓不屈の人」も今回で最終回です。今回は、皆さんからいただいた塙保己一に関する質問などにお答えします。

## 特別版

### 塙保己一の生涯

連載『塙保己一の生涯』で皆さんから寄せられた塙保己一に関する質問やリクエストにお答えします。

### 雨富学校との出会いや、経緯について教えてください

結論を言ってしまうと、雨富学校に弟子入りした経緯は不明です。

ただし、あらかじめ準備がされて辰之助(保己一)は江戸へ出たものと思われまます。おそらくは保木野村の名主と領主の旗本永島恭林が相談して決めたのだと思います。



ではないのでしょうか。永島氏は当道座と関わりがあったようで、恭林は豊澤学校の子どもを養育にしています。永島氏は、盲人に対して理解があり、有能と評判の辰之助の江戸での道筋をつけてくれたのではないのでしょうか。

### 塙保己一は家族を持たなかったのですか

保己一には、妻は三人いたようです。名前はわかっていますが、最初の妻は天明二年

(一七八二)、保己一が三七歳の時に御三家の紀伊家に仕える医師東条清氏の娘と結婚しています。この妻とは後に離縁し、次に西文次郎の娘を娶りました。この方とは死別して、三人目の妻を娶ったようです。子どもは五人いたようで、最初の子が娘でとせ子といい、天明三年(一七八三)に生まれています。二番目が長男の寅之助で、八歳で亡くなりました。次男は道之助、三男が熊太郎、四男が次郎忠宝です。次郎忠宝が保己一の家を継いでいます。



### 塙保己一に関するエピソードをもっと教えてください

#### ①保己一の記憶力

保己一は国学者でしたが、和歌の先生でもありました。七十歳の頃、和歌の会に招かれた保己一は参加者の詠んだ和歌五十句を記憶して、もう一度思い出して採点をしようと思いました。しかしどうしても三句が思い出せず、保己一はこんなに記憶力が衰えてしまったのは先が長くないだろうと、寂しくつぶやいたといっています。

和歌を四十七句も暗記することがすごいことなのに、保己一の記憶力のすごさを物語るエピソードです。



#### ②保己一と鍼灸

保己一は若い頃、按摩や鍼灸の修行に苦勞していました。そんな時に、ある家のおかみさん

が病気で苦しんでいるのを見かけ、保己一はかわいそうに思い、下手ではあるが鍼と按摩をしてあげたところ、おかみさんの病気が治り、喜んで帰っていったといっています。あとでこのおかみさんは、お金を保己一に渡そうとしましたが、保己一は決して受け取りませんでした。

後に保己一は「お金を貰おうとしてやったのではない、ただ人のために何かをしたかっただけで、心を慰めたかったのだ」とにかく病気が治ってよかった」と語ったそうです。

#### ③心の目

寅之助(保己一)は目が見えないためによくいじめにあっていたといっています。それでも寅之助は友達と一緒に遊ぶのが楽しくて仕方ありませんでした。

ある日、ガキ大将と他の友達と一緒にもち草(ヨモギ)摘みをしました。ガキ大将は寅之助の母親から頼まれたといつて、

みんなで採ったもち草を広げ、寅之助のザルに別の草を多く入れ、自分のザルにもち草を入れて、残りを他の二人のザルに入れました。寅之助は「餅に入れない草が多いからみんなにあげるよ、自分はこれから一人で摘んでから帰るよ。また明日遊んでおくれ」と言い、三人に分け与えたといっています。

寅之助を迎えにきた母親は、陰で子どもたちのやり取りを聞きながら涙を浮かべたといっています。母親は寅之助に「お前は目が見えないのに、どうしてこんなに上手にもち草が摘めるの」と聞くと、寅之助は「龍清寺の和尚さんが、手で探ったり、匂いをかいだりしながら何でも分かるように教えてくれたんだよ。おつかあ、おいらは心の目が見える大人になる」と、夕日の落ちたあぜ道で話したといっています。

★塙保己一記念館(アスパアこだま内) ☎72・6032・FAX 71・5889

## イベント

### 『群書類従』にさわってみよう

昔の本は今の姿と違い、和紙を重ねて、端を糸でとじていました。このようなかたちの本を和とじ本といえます。塙保己一の『群書類従』も和とじで出版されています。(公社)温故学会が刷った和とじ本『群書類従』を実際に手に取って、さわってみましょう。

開催期間 3月15日(火)〜31日(木) 会場 塙保己一記念館

対象 どなたでも

※月曜休館(休日の場合は翌日)。

★塙保己一記念館(アスパアこだま内) ☎72・6032・FAX 71・5889



### 不撓不屈の人が残した「世のため後のため」

塙保己一没後200周年記念企画

「不撓不屈の人」は

いかがでしたか。連載「塙保己一の生涯」や、没後200年の時を経てなお、郷土の誇りとして顕彰され、全国に尊敬の念をもって評する多くの方々がいることを紹介させていただきました。

保己一が偉人と評されるには、彼自身のたぐいまれな才能とたゆまぬ努力があったためであることは言うまでもありません。

しかし、彼自身はそのこと以上に常に世のためには自分が何ができるのか、後のために何ができるのかを考えていたのではないのでしょうか。この「世のため、後のため」という考え方は、現在、本庄市の将来像にも取り入れられています。

今を生きる人々のために、また、100年後、200年後の世に生きる人々のために、「今できることを誠実に続けること」が、不撓不屈の人塙保己一が私たちに託したメッセージではないでしょうか。

